

2025 年 12 月 8 日

2025 年度 事務職員海外派遣研修プログラム（実務レベル）報告書

山本 剛毅

1. 研修概要 *総務部資料より

(1) 目的

本学が掲げる「中部から世界へ」というビジョンのもと、最低限の英語スキル・国際対応力を身につけることを目指し、事務職員の国際力の底上げを図り、将来の海外展開の可能性を見据え、今から計画的に国際人材の育成に取り組む。

(2) 研修先

Utah Tech University（ユタ工科大学）米国ユタ州セントジョージ市内
受入先 OFFICE OF INTERNATIONAL PROGRAMS（通称 OIP、国際化部門）

(3) 期間

令和7年10月5日から10月25日

(4) 育成する人材像（実務レベル）

- ・海外赴任・長期駐在が可能
- ・現地スタッフと高度な交渉が可能
- ・海外での調査が可能

(5) 派遣先での課題

- ① ユタ工科大学のイベント開催にかかる意思決定や準備をユタ工科大学職員と共に行う（インプット）
- ② 海外での人材採用方法、人事制度に関わる慣習について聞き取り調査を行う（インプット）
- ③ 名城大学のプロモーションイベント（名城大学の紹介および日本文化体験）を現地でを行う。イベント開催にあたり、現地スタッフ・学生に運営補助を依頼し、海外のスタッフとの協働について実践で学ぶ（アウトプット）

(6) 宿泊場所

ホームステイ

2. 研修先について（事前学習と現地調査情報含む）

(1) ユタ工科大学（Utah Tech University）

①概要

ユタ工科大学は、1911年創設の公立大学であり、ユタ州セントジョージ市に所在。かつて「Dixie State University」として知られていたが、2022年に改称し、現在は「Utah Tech University」として地域と産業界に根ざした教育を展開。

②規模と組織

学生数は約 13,000 名、キャンパス面積は約 117 エーカー。6 学部（芸術、ビジネス、教育、健康科学、人文科学、工学・技術）を有し、幅広い分野で教育を提供。

③教育理念

モットーは“Active Learning, Active Life”。実践的な学びを重視し、地域社会や産業界との連携を通じて学生に実践的スキルを習得させる教育方針を掲げる。

- ・少人数教育（学生教員比率 20:1）によるきめ細やかな指導。
- ・州内で最も手頃な学費水準を誇り、奨学金や経済的支援制度も充実。
- ・看護系進学率の高さや、地域に根差した教育活動が評価されている。

(2) ユタ州

① 地理と自然

アメリカ西部に位置する州。州都はソルトレイクシティ。面積は約 84,900 平方マイルで全米第 11 位の広さを誇る。ロッキー山脈からグレートソルト湖砂漠まで多様な地形を有し、ザイオン、ブライスキャニオン、アーチーズなど世界的に有名な国立公園を擁する。

② 人口と文化

人口は約 344 万人で、その約 80%が州北部のワサッチフロント（ソルトレイクシティ周辺）に集中。州の文化は、モルモン教（末日聖徒イエス・キリスト教会）の影響を強く受けており、勤勉・共同体意識・家族重視の価値観が根付いている。

③ 経済と産業

観光業、鉱業、農業に加え、近年はソフトウェアやハイテク産業が急成長しており、「シリコンスロープス」と呼ばれる IT 産業集積地が形成されている。

④ 気候

年間を通じて乾燥した気候で、セントジョージ市は特に温暖で晴天が多く、教育・生活環境としても魅力的がある。

(3) セントジョージ市

① 基本情報

セントジョージ市はユタ州南西部ワシントン郡に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境を有する都市。近年、全米でも有数の人口増加率を示しており、急速な都市成長を遂げている。

② 人口動態と増加の背景

2010 年の人口約 71,000 人から 2020 年には約 87,000 人、2024 年には推定 107,000 人を超え、全米でも突出した成長率を記録。

背景要因として、温暖で乾燥した気候による居住環境の魅力、国立公園やリゾート地へのアクセスの良さから観光・移住需要が増加、Utah Tech University や Dixie Technical College など教育機関の存在による若年層流入、「Tech Ridge」開

発をはじめとする新興産業の誘致による雇用機会の拡大。宗教文化の影響として、末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）の影響が強く、共同体意識・家族重視の価値観が人口定着を支えている。住宅価格の上昇。人口増加に伴い、住宅需要が急速に拡大。セントジョージ市の住宅価格は州平均を上回るペースで上昇しており、特に新築住宅や郊外開発地で顕著。その影響として、若年層や新規移住者にとって住宅取得が難しくなる一方、建設業や不動産業は活況を呈している。地域経済の成長とともに、生活コスト増加という課題も生んでいる。

③ 新興産業と都市開発

スタートアップや IT 企業を誘致する開発が進行中。Utah Tech University が人材供給源となり、若い労働力を地域産業に結びつけている。セントジョージ市は「Best Performing Small Cities」に選出されるなど、起業環境として高く評価。

3. 企画提案内容 ～名城大学プロモーションイベントについて～

取り組み課題である名城大学のプロモーションイベントの実施に向けて、応募時に以下の内容を提案し、渡航後に OIP スタッフと調整。

(1) 企画タイトル

MU×UT Pop up shake in Utah Tech – Let's Create Together.

(2) 目的

名城大学の特色や教育理念をユタ工科大学の学生に体験的に伝える。

将来的な留学先としての魅力を高め、名城大学への関心を喚起する。

(3) 背景

名城大学とユタ工科大学はいずれも「実践型教育」「地域連携」を重視しており、理念的共通性を有する。

(4) コンセプト

「名城大学を語るのではなく、体験する場へ」

(5) 特徴

- ・名城大学が展開する共創空間「社会連携ゾーン shake」のコンセプトをもとに、ユタ工科大学内のオープンスペースを活用し、可変型・対話型の空間をキャンパス内に“出現”させる Pop up 型イベント
- ・本学の実践型教育・地域連携・学生の挑戦を生み出す仕組み、留学プログラムを発信
- ・対話と創造を通じた共創型イベント（参加型展示+体験型ワーク+交流企画の 3 要素）
- ・現地学生と「問いと対話」でつながり、印象深い記憶を残す

(6) 内容

- ① 名城大学の創造型実学の教育プログラムや多様な学生コミュニティの紹介展示
(例：留学プログラム、オナーズプログラム、REALIZE AWARD、社会連携事業等)
- ② 双方向なコミュニケーションを生み出すアイデアエクステンションスペース

(ホワイトボード等を設置し問いと学生のアイデアや物語を記入)

- ③ 留学や地域社会の未来を語り合う対話イベント実施。例：ミニフューチャーセッションや共創アイデアソン（問い：What makes a great study abroad experience in Japan?）
- ④ 茶道や座禅や書道など日本文化体験を盛り込んだ創作ワークショップや文化体験

(7) 協力依頼事項

- ① イベント開催場所の提供（キャンパス内オープンスペース）
- ② 設備提供（ホワイトボード、机、椅子、電子パネル）
- ③ 集客支援（ポスター掲示、学生向け広報）
- ④ 協力してくる学生の募集（企画・設営・ファシリテーション）
- ⑤ 名城大学留学経験者へのヒアリング・協力
- ⑥ 運営サポートや学生参加に関する助言・調整

(8) 期待される効果

- ・ユタ工科大学の学生が名城大学の価値観とつながる
- ・将来的な交流・留学の可能性を思い描ける場を共に創出。

4. 研修スケジュールについて

(1) 当初の予定

- 第1週 STUDY ABROAD FAIR 留学フェアのイベント実施/Pop up shake 実施
- 第2週 外国人留学生による文化発信交流イベントの実施/Pop up shake 実施
- 第3週 ホームカミングウィークへの参加/Pop up shake 実施

(2) 変更後の予定

- 第1週 企画準備、大学各部署の見学視察
- 第2週 STUDY ABROAD FAIR 留学フェアのイベント実施/Pop up shake 実施
- 第3週 ホームカミングウィークへの参加/Pop up shake 実施

(※ 渡航直前の予定変更。文化交流イベント延期・STUDY ABROAD FAIR の後ろ倒し)

5. イベント開催に向けた事前準備について

(1) 渡航前

- ① 名城大学留学プログラムの情報収集/国際化推進センターへのヒアリング実施
- ② 日本文化発信方法の事前学習（自己学習として）
 - ・愛知旅 EXPO の視察
名古屋商工会議所の伝統工芸の支援事例など最新の取り組みや愛知・岐阜・三重など中部地区の自治体のインバウンドに向けた取り組み情報を得る。
 - ・大阪万博日本館とアメリカ館視察 文化やメッセージの発信方法を学ぶ。

(2) 渡航後

- ① 部内調整 企画書作成・提案、英語資料準備
- ② 備品確保（ホワイトボードなど）
- ③ 協力者確保 学生サポーター募集
- ④ 協力者への事前情報共有

6. 日々の活動内容

（1）渡航・到着（DAY0～DAY1）

ラスベガス経由でシャトルバスを利用し、セントジョージに到着。OIP スタッフによるキャンパスツアーを受け、学生支援棟、e スポーツルーム、メカトロニクス棟などを視察。ホームステイ先と合流し、地域文化（ハロウィン装飾など）を体験。

（2）初期活動（DAY2～DAY3）

OIP スタッフとの面談を通じて留学生の学生支援・留学生マーケティング・留学生向けの英語クラスの内容を理解。大学ブランディング部署や奨学金制度の仕組みを学ぶ。キャリア支援イベントや留学生交流スペースを見学し、POP UP shake 企画書のラフ案を作成。ATWOOD Innovation Plaza を訪問し、地域連携・起業支援施設の仕組みを調査。HR 制度ヒアリング準備を開始。

（3）POP UP shake 準備（DAY4～DAY10）

STUDY ABROAD FAIR（留学フェア）イベントの中で、POP UP shake を開催することとなる。レイアウト・コンテンツの具体化、英語資料作成。協力学生との打ち合わせ、日本文化サークルとの連携（運営リーダーと面談）。ホワイトボードや備品の確保、展示方法の検討。名城大学への留学経験者・外国人留学生等現地学生とのワークショップの試行。イベントのケータリング調整や広報支援依頼を行い、イベント準備を完了。

（4）POP UP shake 実施（DAY11（10月16日））

STUDY ABROAD FAIR の中に POP UP shake のブース設営。協力してくれる学生たちと共に準備。説明ではなく体験を重視したブースが大盛況となり、持参した名城大学やプログラムの紹介資料・ノベルティがすべてなくなる。日本留学への関心の高さを実感。名城大学への留学経験のある学生と留学希望者の交流が生まれ、shake の理念を体現。夕方から日本文化サークルの料理イベントにも参加し、学生たちと交流。施設面の学生サービスの高さを実感。

（5）交流と学びの拡張（DAY12～DAY13）

前日の名城大学ブースが評価され、開催延期となった外国人留学生による文化発信イベントに変わるイベントとして、JAPAN DAY の企画が OIP のスタッフの意見をもとに開催が決定。翌週のイベント開催に向けて、備品の買い出しなど OIP スタッフと同行。土日には、ホストファミリーや外国人留学生とデイトリップへ。ユタテック男子バスケット部の試合観戦を通じてアメリカの文化を体験。偶然、名城大学との協定に関わった元教員と出会い、名城大学との国際連携の歴史を確認。

(6) JAPAN DAY@OIP lounge (DAY17 (10月22日))

好評を得た Pop up shake 企画を OIP lounge 内で実施。書道・茶道・浴衣・坐禅・折り紙など日本文化体験が人気。shake シートを活用した留学をテーマにした対話にも外国人留学生が取り組んでくれた。多国籍の留学生が参加し、名城大学の存在感を国際学生に強く印象づけることができた。文化体験を通じて国際学生とのネットワークを拡大。

(7) 最終交流と振り返り (DAY18~DAY19)

OIP のスタッフの皆さんとの食事会やスポーツ観戦 (女子バレーボール) を通じて大学文化を体感。新学長の就任セレモニーに参加し、大学の方向性を理解することができた。OIP スタッフの英語クラスを見学し、コミュニケーション教育を学ぶ。ホームステイ先で最後の夕食と星空観賞を行い、家族との交流を深めた。研修全体を通じて「大学と地域コミュニティの結びつき」「学生主体の文化」「大自然とアウトドア教育」を体感することができた。

7. 結果・成果について

(1) 名城大学プロモーションイベント *実施内容写真などは報告会資料参照

①10月16日 11:00~14:00 STUDY ABROAD FAIR イベントにてブース設置

企画 Pop up shake in UT STUDY ABROAD FAIR

場所 ユタ工科大学 キャンパス 緑の広場 (The Diagonal)

内容 ユタ工科大学にて「POP UP shake」を開催し、名城大学の特色 (創造型実学・地域連携など) や中部地区や日本文化を体験的に伝える場を設けた。

設営 会場レイアウト・展示物配置・対話型空間について

- ・社会連携センター主催シェア本棚企画 I am Books MEIJO 開催
日本文化や中部地区を書籍やパンフレット等で紹介するコーナー設置。
書籍とともに日本文化を感じるプロダクトの設置
- ・名城大学への留学プログラムや大学紹介コーナー設置 (パンフ・ノベルティ)
- ・双方向の会話を生み出すアイデアエクステンションスペース設置
オリジナルな留学プログラムを生み出すアイデア創発シート shake やプロジェクトを書き出すシートを準備
- ・留学を語り合う対話ブース設置
- ・書道、折り紙、茶道、座禅、浴衣など日本文化体験ブース設置
- ・海外のブースと同様に、日本のお菓子などを設置し配布。
- ・雰囲気づくりのため、スピーカーを持参し日本の音楽セットリスト作成し BGM として流す。

結果 POP UP shake イベントを通じて、名城大学の取り組みやプログラム、日本文化を体験的に発信

- ・POP UP shake 参加学生：50~70 名程度

・学生との対話セッション：10 回程度
・日本文化体験：15 名程度
・名城大学留学プログラムチラシ（50 部）・パンフレット（30 部）、大学紹介英語パンフ（30 部）、ノベルティフリクションボールペン 30 本すべて配布完了

成果 OIP 主催と各学科主催合わせて全 15 ブースある海外プログラムの中でもっとも集客力のあるブースとなり、ユタ工科大学の学生から「日本に留学したい」「名城大学の留学プログラムについてもっと知りたい」との声が寄せられた。Utah Tech University の学生・教職員との直接交流により、相互理解を促進。ブースに立ち寄る学生が開始から終了まで途絶えることなく続いた。協力してくれる学生へ本企画の狙いやワークショップ等の運営方法を事前レクチャーできたことにより、職員が私一人しかいないブース運営の中でも数多くのコンテンツを回すことができた。ユタ工科大学の学生たちの協力を頂きながら、彼らにもブース運営を楽しんでもらうことができた。運営に協力してくれた学生の友だちも多くブースを訪れてくれるなど集客についても協力を頂けた。

感想 一方的な情報発信ではなく、交流・対話・体験をもとにしたブースと集客力だったため、OIP 職員からも高い評価を頂いた。

STUDY ABROAD FAIR は OIP の中でも年間を通じてハイライトとなる大きなイベントの 1 つ。いかに集客するかが大事な指標。今回の開催場所は野外。人通りが多いキャンパスのメインの 1 つとなる導線で、緑の芝生があり開放的な場所にテントを設置し開催。365 日のうち 300 日くらいが晴天となるセントジョージ市だが、この週は雨が続けていたが当日はなんとか晴れ。フードトラックを導入し、食事が楽しめるようにしている。（ブースをまわると割引が受けられるような工夫）また各ブースにスナックなどが設置され、学生はスナックを食べながら各ブースの話聞いており、カジュアルな雰囲気。また学生が多くのブースをまわる仕掛けとして、大学グッズがあたるくじが導入されており、翌日 8 名の抽選を行った。改めて開催場所の大切さや楽しいと感じること、食べ物があることなど人があつまるところの大切さを実感。今回の STUDY ABROAD FAIR と Pop up shake で作り上げたブースや雰囲気がとても相性が良かったと感じた。日本から持参した書籍紹介コーナー（社会連携センター企画 I am Books Meijo）も学生だけでなく教職員も興味深く書籍の紹介文章を読んでもらえた。今回のブース運営から、改めて日本のコンテンツ力や人気の高さを感じた。日本や中部地区のインバウンド等のポテンシャルの高さを感じた。

②10 月 22 日 11:00 ~14:00 JAPAN DAYS OIP lounge にて実施

企画 Pop up shake in UT “JAPAN DAY“

場所 ユタ工科大学 OIP lounge

内容	ユタ工科大学にて「JAPAN DAY」を開催。Pop up shake ブースを OIP lounge に設置。名城大学の特色（創造型実学・地域連携）や中部地区や日本文化を体験的に伝える場を設けた。
設営	<p>会場レイアウト・展示物配置・対話型空間について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会連携センター主催シェア本棚企画 I am Books MEIJO 開催 日本文化や中部地区を書籍やパンフレット等で紹介するコーナー設置。 書籍とともに日本文化を感じるプロダクトの設置。 ・名城大学への留学プログラムや大学紹介コーナー設置（パンフ・ノベルティ） ・双方向の会話を生み出すアイデアエクステンジスペース設置 オリジナルな留学プログラムを生み出すアイデア創発シート shake やプロジェクトを書き出すシートを準備 ・留学を語り合う対話ブース設置 ・書道、折り紙、茶道、座禅、浴衣など日本文化体験ブース設置
結果	<p>POP UP shake イベントを通じて、名城大学の取り組みやプログラム、日本文化を体験的に発信。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・POP UP shake 参加学生：50～60 名程度 ・学生との対話セッション：5 回程度 ・日本文化体験：30 名程度
成果	ユタ工科大学の実践型教育と地域連携の文化を体感し、名城大学の特色を国際的に発信するイベントを成功させた。POP UP shake を通じて、多様な学生間や教職員の交流を生み出し、国際学生に強い印象を残すことができた。参加学生から「日本に留学したくなった」「名城大学をもっと知りたい」との声が寄せられ、国際ネットワーク拡大に資する成果を得た。学生からの肯定的反応により、名城大学の魅力を体験的に伝えることができた。
感想	OIP スタッフや OIP 学生スタッフと協働で会場設営。OIP でのイベントのため外国人留学生が次々に来てくれる。今回のイベントのプロモーションが OIP 内にとどまっていた影響で、外国人留学生以外の学生の参加は少なかったが、スペイン、ウガンダ、ペルー、ドイツ、ベネズエラ、香港、韓国、モンゴルなど多くの学生が参加。書道、茶道体験が特に人気コンテンツとなった。日本文化体験をまわすことでいっぱいとなり、ワークショップの運営のサポートが十分にできなかったが、OIP 学生スタッフが shake シートを活用し参加した学生とワークショップを実施。多くの学生が文化交流に参加し、喜んでもらえ、名城大学や中部地区の紹介も体験とあわせて紹介することができた。

(2) アメリカの人材採用方法、人事制度に関わる慣習について聞き取り調査について

①調査について

デスクトップリサーチをもとに事前に情報を集めながら、ユタ工科大学の職員へヒアリングを行った。

②アメリカの大学の人材採用の特徴について

・ジョブ型雇用

採用は職務記述書 (Job Description) に基づき、明確な職務範囲と責任が定義される。即戦力や専門性を重視し、応募者は自身のスキルや経験を具体的に示す必要がある。

・ポジションベース採用、採用を担当するのは現場責任者

日本のような新卒一括採用は存在せず、空いている職務に対して、必要なスキル・経験を持つ人材を募集。部門横断の異動も少ない。中途採用が一般的であり、キャリアの途中で大学職員に転職するケースも多い。

採用活動は現場責任者が行う。人事は求人広告の掲載支援やコンプライアンスなどの確認を行う。ポジションによると思うが面接には複数の方が同席。専門性・経験での採用のため給与などは業界や職種の水準をもとに決定される。

・採用基準

学歴や資格よりも職務に直結する経験や成果が重視される。Diversity、Equity、Inclusion (DEI) の観点から、多様な背景を持つ人材を積極的に採用する傾向。

O I Pのスタッフは、アメリカ以外のルーツ (中東、南米、中国など) を持つ職員が多く在籍。

・高い流動性を持つ労働市場と個人のキャリア開発意識

ジョブ型・ポジション採用・年俸制で、部門を超える異動がなく、昇進も個人でポジションをみつけて申請する必要があるため、個人のキャリア開発意識は高い。自分のポジションアップや他の経験を得るためには、自ら動く必要がある。ジョブ型・ポジション採用を支える環境として、高い流動性を持つ労働市場が存在。

・大学職員の高い専門性を支える仕組み

専門性養成と転職活動などの情報収集の場として機能する専門職団体が存在。

職員向けの大学院教育 (高等教育研究の修士課程プログラム)

③人事制度の慣習について

・成果主義評価

業績や成果に基づいて昇進・昇給が決定される。定量的な目標設定と評価指標が明確に示される。

・キャリアパスの明確化

職務ごとに昇進ルートが設定されており、専門職としてのキャリア形成が可能。

管理職への昇進も「成果+リーダーシップ能力」に基づく。

- ・研修・育成制度

職務に直結する短期集中型の研修が中心。必要なスキルを即座に習得させる仕組みが整備されている。

- ・契約と福利厚生

雇用契約は職務単位で締結され、更新や条件変更が柔軟。福利厚生は法定基準を中心に、交渉や個別条件で補完される。自ら条件やポジションについてアピールして上司に交渉しに行くスタイル。

④取り組み成果について

- ・人事制度調査の基盤形成

基礎的な情報収集とインタビューシートを作成し、調査枠組みを構築。

日本とアメリカの制度と文化の比較を通じて「制度思想」の違いを明確化。

項目	日本（一般的傾向）	アメリカ（大学職員）
雇用形態	メンバーシップ型（終身雇用）	ジョブ型（職務記述書に基づく）
採用時期	新卒一括採用が主流	通年採用、即戦力重視
採用基準	ポテンシャル・協調性重視	専門性・実績重視
評価制度	年功序列が残る傾向	成果主義、業績評価に基づく昇進
福利厚生	組織主導の手厚い制度	法定福利中心+交渉による条件
キャリア	部署異動で幅広い経験	専門職としてキャリアパスが明確

- ・大学職員の専門化と学費高騰の関係性

アメリカの大学職員の専門化が進み、それが学費の高騰化に繋がっている。

実際にユタ工科大学の様々な部署と職員を紹介してもらったが、専門性に基づいた職務に細分化されていた。オフィスも一人ひとりに用意されていた。

- ・人事制度や慣習を支えるアメリカの労働市場や文化

アメリカの採用手法や人事制度・慣習を支えるアメリカの労働市場、個人の価値観、文化や仕組みを理解することが大切。制度だけ導入しても日本ではうまくいかない。日本でもジョブ型雇用などが話題となっているが、両者の強みを組み合わせた「ハイブリッド型人事制度」が望ましいのではないか。

日本型の強み：長期的な人材育成、組織文化の維持、部門の相互理解や連携

米国型の強み：専門性の確保、成果に基づく柔軟な人材配置とそれを支える高い流動性を持つ労働市場。

- ・職務記述書（Job Description）の大切さと新たな疑問（継続調査項目）

職務記述書(Job Description)に記載される職務内容が曖昧になるとどこまでが誰の仕事なのかわからなくなるのではないか。職務記述書の定期的な見直しの方法やタイミングなど、職務記述書とマネジメント方法について理解が必要。仕事の領域があいまいな業務に誰がどのように対応していくかなど、運用の方法や工夫、課題などもヒアリングが不十分となった。OIP では各スタッフの役割が明確で、サポート

スタッフは存在せず留学生などがインターンシップとして業務に対応。窓口対応や Instagram への投稿やチラシづくりなどは留学生インターンシップ学生が担っていた。STUDY ABROAD FAIR などのように部署全体で運営する大きなイベントは担当以外の職員も設営・撤去などは協力しあっている。

(3) その他追加調査について 起業活動拠点 ATWOOD INNOVATION PLAZA について

①調査目的

本視察調査は、Utah Tech University の Innovation Plaza を中心に、SUCCESS Academy および STEAM Academy の教育モデルを視察し、大学・地域・民間が連携する教育エコシステムの実態を学ぶことを目的とした。

②視察概要

- ・ 訪問先：Utah Tech University Atwood Innovation Plaza
- ・ 対象施設：SUCCESS Academy、STEAM Academy、Makerspace、Business Resource Center、各種インキュベーション施設
- ・ 活動内容：施設見学、担当者との意見交換、学生・子どもたちの活動観察、追加調査による施設構成の把握

③Atwood Innovation Plaza の概要と構成

目的：地域社会と大学の連携拠点。スモールビジネス支援、教育・研究・起業活動の促進。

利用割合：地域コミュニティ 75%、学生・教職員 25%

主要パートナー：地域最大規模の銀行 ZIONS BANK。ビジネスリソースセンターを設置し、資金調達・起業支援を提供。

施設構成：

- ・ Wood Makerspace / Clean Tech Makerspace / Courtyard：試作・創造活動の拠点。
- ・ Soft Cell Biological Incubator：生物学的研究・商業化支援。
- ・ STEM Academy：政府政策に基づく K-12 向け STEM 教育施設。プログラミング、ロボティクス、夏季プログラムを提供し、女子生徒への早期 STEM 機会提供を重視。
- ・ Success Academy：大学連携型専門高校。早期進学制度を提供。
- ・ ZIP (Zion International Programs)：留学プログラム支援。名城大学とも 30 年近い関係性を持つ。
- ・ Doc Labs：血液中病原体分析、予防技術の商業化を目指す研究拠点。
- ・ 会議室・ピッチ教室：ビジネス開発・発表の場。

④主な学びと気づき

- ・ 空間の力 Innovation Plaza は大学・高校・地域・民間が交差する“教育と起業の交差点”。空間そのものが「挑戦と創造」を象徴し、利用者にもメッセージを

発している。

- ・共創の文化 UT は「すべてを自前で抱え込まず」、教育委員会や民間プレイヤーに場と資源を開放。大学は“編集者”として空間と理念を提示し、運営は多様なプレイヤーに委ねることで教育エコシステムを形成。
- ・物語と挑戦 STEAM Academy は物語型プログラムを通じて子どもたちを“NextGen PRO”として扱う。Makerspace やインキュベーション施設から、アウトドア用品や教育用ロボットなどの大学発スタートアップが誕生。BUMPABILITY や Zion VR など、Innovation Plaza から生まれた企業が成長している。
- ・やりやすさの構造 St. George という都市のスケール感が、大学・地域・企業の顔の見える関係を可能にしている。空間設計と文化的土壌が「やりやすさ」を生み、教育と起業の実験的モデルが展開されやすい環境となっている。

⑤まとめ

今回の研修を通じ、UT の Innovation Plaza は単なる施設ではなく、空間・関係・文化・産業が編み込まれた教育と起業のエコシステムであることを確認した。本学においても、社会連携ゾーン shake や M-studio など共創空間を活用し、学生・地域・企業が交差し、未来の学びと挑戦を育む場としてさらに展開できる可能性を秘めている。

8. 本研修での学びや今後の展望について

(1) 教育発信に関する学び

①体験型発信の効果

POP UP shake を通じて、単なる情報提供ではなく「体験を通じた理解」が学生の関心を強く引き出すことを確認した。参加学生から「日本に留学したい」「名城大学をもっと知りたい」との声が寄せられ、国際ネットワーク拡大に資する成果を得た。

②文化的背景の重要性

日本文化の紹介は教育理念の理解を促す有効な手段であり、文化と教育理念を結びつけることで国際的な共感を得やすいことを学んだ。

(2) 人事制度調査に関する学び

①制度思想の違い

日本の「メンバーシップ型」と米国の「ジョブ型」の違いは、労働市場やキャリアについての価値観などの差異に基づいていることを理解した。高い専門性を持つ方は、ハイリスク・ハイリターンで、安定性は落ちるが個人の専門性を活かした仕事につくことができる。高い専門性を持たない方は、ローリスク・ローリターンで安定性をもった就業も可能。

②成果主義の背景

米国大学における成果主義は、専門性と責任の明確化を前提としており、組織文化との整合性が不可欠であると気づいた。

③調査の継続性

現地での人事部門や部署の責任者へのインタビューは未実施ながら、現場責任者へのオンラインでの継続が可能であることを確認。

(3) 都市・地域理解からの学び

①人口増加の影響

セントジョージ市の急速な人口増加と教育機関や産業構造に影響や関連が深いことを実感した。地域連携を重視し、存在感を発揮できている大学の好事例から学べた。

②宗教文化の基盤

モルモン教の価値観が地域社会の結束や教育姿勢に影響している点を理解し、制度や文化を考察する際には宗教的背景が不可欠であると学んだ。

③新興産業の可能性

Tech Ridge 開発に象徴されるように、都市が新しい産業を育成しようとする動きは教育機関との連携を前提としていることを確認した。

(4) 主体的な実践から得られた学び

①段取り力の強化

海外での企画・設営・運営を通じて、限られた時間と資源の中で柔軟に対応する力を高めた。国内外を問わず、計画と即応のバランスを取る段取り力は普遍的スキルであることを確認。

②国際的視野の拡大

名城大学の理念を海外で発信する経験を通じて、教育活動を「国内向け」から「国際的文脈」で捉える視点を得た。

③空間づくりと場の力

POP UP shake では「場の設計」が成果を左右し、書道や茶道の体験を交流の場へと転換する工夫が学生の心を動かした。

④制度思想と文化背景の結びつき

人事制度の違いを文化・宗教・地域社会の価値観と関連づけて理解し、制度は「文化の鏡」であることを学んだ。

⑤驚きと共感を生む力

「人を驚かせ、楽しませる」姿勢が学生の心を動かし、国際交流において強い力になることを確認。

(5) リアルキャンパスの意味（オンライン・AI時代における価値）の再認識

①驚きと共感の場

キャンパスは偶然の出会いや予期せぬ体験を生み出す場であり、POP UP shake のようなイベントはその象徴となりえる。

②出会いと気づきの場

異なる学部・文化・背景を持つ学生が集うことで相互理解と新しい発想が生まれる。地域社会との接点もキャンパスが媒介することができる。学生が「ここに来ると新しい発見がある」と感じる空間設計が不可欠。

③ワクワクするキャンパス

AI やオンライン学習が知識習得を支える一方で、キャンパスは「人間らしい体験」を提供することで差別化できる。キャンパスを歩いていて新しい出会いや気づきにあふれるキャンパスがこれからより必要とされるのではないか。単に教室があるだけのキャンパスではなく、触れることができる情報量や質の高さ、学生の様々な体験につながる専門的な機能を持つスペースなどの設置など場づくりがますます重要になると感じた。「人を驚かせ、楽しませる」姿勢が今後大学づくりの強みとなるのではないか。キャンパスは「学びの場」であると同時に「未来を描く場」となる。

(6) 生成 AI の仕事への浸透

滞在期間中、OIP のスタッフのオフィスを借りることができ、対面や電話での打ち合わせに同席させてもらう機会を得た。また「海外大学への留学支援」に関連し、業務の自動化を目指したシステム開発の様子をみることもできた。生成 AI を活用し、大学のシステム部門や調達部門との打ち合わせを重ねながら、限られた予算と人員で業務効率をもたらすシステム開発に取り組まれていた。改めて、DX 人材を育成する研修の必要性を感じた（デジタルスキルと課題解決スキルを組み合わせ、業務効率化を推進する研修プログラムのようなもの）。

(7) まとめ

本研修を通じて、大学業務や人事制度の理解に加え、地域文化・スポーツ観戦・自然体験を通じて、アメリカの大学教育と社会の結びつきを多角的に学ぶことができた。ユタ工科大学では、学生や地域住民に対して、多様な機会を提供し、地元文化と連動した取り組みも数多く見られた。

この経験から、オンライン教育や AI 技術が急速に進展する時代においても、大学キャンパスは単なる学習の場ではなく、人と人が出会い、予期せぬ気づきやワクワクを共有し、未来を描く場であり続けるべきだと改めて感じた。

また日本の文化や環境を基盤としたコンテンツの素晴らしさや中部地区の豊かさを再認識することもできた。これらは、本学が今後「創造型実学」を世界へ広げていく上で重要な要素となり、中部地区由来の日本文化の紹介は本学の教育理念の理解を促す有効な手段となる。文化と教育理念を結びつけることは国際的な共感を得やすいため、実学×地域連携の特徴と中部地区の文化・歴史を融合させた教育コンテンツの開発などに取り組んでみたい。

まずは、今回の研修で得た学びを現在所属する株式会社名城大学サービスの業務に還元したい。具体的には、教育支援事業（海外 PBL の運営支援や海外フィールドワークの

開催支援)、新規事業としてリカレント教育プログラムの開発の検討や(例:ユタ工科大と連携した海外を舞台に企業向けの教育プログラムなど)や子ども向けの STEAM 教育プログラムや STEAM 留学プログラムの開発の検討など。